



ちい（5歳♀）がある夜、台所のテーブルの下で寝ていたと思ったら突然、「ぎゃん」という聞いたことのない声を出し、私にすがりついてきたので、どうしたのかと思って抱き上げると、また変な声を出して今度は夫にすがりつきました。抱いたり触ったりすると痛がってあばれ、後ろ脚を両方、引きずるようにして逃げ回るので。でも、脚にもどこにも外傷は見当たらないのです。夫がちいを落ち着かせようと、「ちい、一緒に寝よう」と言って寝室へ連れて行ったのですが、間もなく夫が「ちいに噛まれた」と言って出てきました。ちいは、あまりの痛さで混乱し、隣にいた夫の手のがぶりと噛み付いてしまったのでした。

犬は痛みに強い動物であり、外敵に襲われないよう、痛みや体の不調を隠す習性があるそうです。なのに、ちい（5歳♀）がこれほどまでに痛みを訴え、助けを求めているのはただ事ではありません。私は初めて、夜間動物病院というところに電話をしました。外傷はなく、後ろの両足をひきずって歩こうとし、すぐにぺたんとしりもちをついてしまうことや、抱っこを嫌がってあばれることを伝えると、受付の女性はすぐに、「ヘルニアの疑いがあります。時間が経つと、マヒが進んで歩けなくなるかもしれませんので、連れてきたほうが良いです。」と言いました。私は、以前テレビで見た、下半身を車いすにくくりつけて散歩をする犬の姿を思い出し、大変なことが起きているのだと知りました。ちいは痛みに耐えかねて呼吸が速くなり、そのせいか体温も上がっていました。

その夜ちいは、背中の痛みで呼吸が荒く、速くなっていました。短頭種の犬は、こういう呼吸が長く続くと熱中症のような状態になりやすいので、早くなんとかしなければなりません。「ちい、ドライブに行くよ。」と声をかけると、4本の脚でしっかりと立ち上がり、車まで自分で歩き、夫に抱っこされて後ろの席に乗りました。夫がまた、手を噛まれると気の毒なので、厚めのバスタオルを夫に渡し、手にまいてもらいました。夫は、「（私が）ビール飲んでいなくて良かったね。タクシー代がかかるもんね。…じゃあ、夜中のドライブに行きますか。」と言って、これから運転する私を落ち着かせようとしていました。ここで焦って事故など起こしたら、どうにもなりません。

夜間動物病院に着くと、狭い待合室は急患の家族でいっぱいでした。そこへ、毛布にくるんだ赤茶色の猫を抱いた男の人が入ってきて、奥の処置室へ運び込みました。毛布の端から出ていた猫のしっぽと脚は伸びきって、まったく動いていませんでした。待合室にいた5人家族の犬も状態が悪いようで、奥さんが何度も処置室に呼ばれていました。

時刻は夜の11時すぎでした。待っている間もちいは、痛みのせいでかなり息が荒くなっていましたので、受付の女性に相談しました。「9時半ころからもう2時間も速い呼吸が続いて、体温が上がってきて心配なのですが…。」と言うと、「それでは、順番が来るまでICU（集中治療室）で待ちましょうか。ここより涼しい、ケースの中です。もし、嫌がって暴れたりするようでしたら、すぐに処置室へ連れて行きますよ。」と、奥さんが優しく話しかけてくれました。

たら、お呼びします。」と言って、ちいを抱いて奥へ連れていきました。

男の人が毛布にくるんで運んできた猫は、手当の甲斐もなく、息をひきとったようでした。運んできた人は、飼い主ではなく、ケガをして動けない猫を発見した、通りすがりの人で、駆け付けた警官に状況を話していました。その後、病院の職員がその男の人に労いとお礼の言葉をかけ、「あとはお任せください」と、彼を見送りました。まるで、動物救命医療のドキュメンタリー番組のようでした。猫はかわいそうでしたが、猫を救おうとした通りすがりの人に、高額な医療費が請求されたりはしないのだと知り、少しほっとしました。

やがて、ようやくちいの順番が来て、私と夫が奥に呼ばれました。ちいは、「ICU」と呼ばれる涼しいプラスチックのケースの中で、静かにしていました。若い獣医さんが、診察台の上にちいを立たせ、頭のほうから順に全身をチェックし、最後に後ろ足の甲を片方ずつ、診察台のへりにこするようにして、足先の反射を確認しました。軽度の椎間板ヘルニアの疑いがあるので、ステロイドの注射をして、明日、かかりつけの病院でもう一度診てもらおうように、とのことでした。

注射には、痛みどめも入っているということだったので、翌朝の受診まで、ちいがなんとか眠れますように、と祈りながら過ごしました。ぜんそく持ちだった息子が幼いころ、夜中に発作をおこして苦しそうに眠っていた姿を思い出しました。当時の私は、そのたびに仕事を休むこともできず、帯広の姑や、小樽の母、と

きには父にまで息子の看病を頼んで仕事に出ました。息子は、いろんな人の愛情をたっぷり受けて、ちょっと（かなり？）頼りないけれども心だけは優しい子に育ち、行きどころを失った私の愛情は今、ちいやれんが仕方なく受け取ってくれています。ちいとれんは、保育園がなくてもちゃんと大人になってくれて、楽だなあ、と思っていました。病気のときには人間以上に、あっという間に具合が悪くなり、様子を見ている暇もなく、すぐに手当をしなければ手遅れになりかねません。

夜間動物病院から帰った翌朝は、かかりつけの病院が休診日だったため、別の病院で飲み薬をもらい、家に帰りました。ここでは、ちいをなるべくケージに入れて過ごすように、とのアドバイスがありました。具合が悪いのに閉じ込めておくのはかわいそうだなと思いました。

ちいの後ろ脚の麻痺が進んでいるのを確認した先生は、
「病院ならば24時間点滴をして、何かあってもすぐに対応ができますし、このまま悪くなるようだったら検査設備のある大学病院に連絡して、CTやMRI検査、内服薬で対応できない場合は、手術もありえます。」

と説明してくれました。先生の口から初めて、「手術」という言葉が出たので私は、覚悟だけはしておかなければいけないと思いました。インターネットの情報の中には、椎間板ヘルニアの手術をすると犬は歩けなくなるなど書いたものもあり、どこのだれがそんなことを書いたのかはわからず、信用できるものかどうかもわかりませんし、読むべきものかどうかとも怪しいのですが、そういう記事を目にしてしまうと、どうしても忘れることはできないのでした。

その日は、お昼頃にちいを病院に預けて家に帰りましたが、これが人間の子どもだったら、一緒に入院してそばで見ていることもできるのに、とか、その翌日は休診日なので、面会さえもできないのか…、とか、歩けなくなったちいの姿を想像したり、悲しいことばかり考えていました。

そして夕方、先生から家に電話があり、思ってもいなかった言葉を聞かされました。ちいは、お昼に入院したあと、夕方になって熱が42度近くまで上がっていました。先生は、

「通常のヘルニアで発熱することはないので、脊髄への感染症の疑いがあります。ステロイドと併用して抗生物質を注射する治療

に切り替えますが、このまま熱が下がらないようだったら、万が一のこともあり得ます。」

というのです。先生のお話は、手術とか、歩けなくなるかもしれないという内容ではなく、命の危険について話しているのだとわかり、私は動揺しました。ちいに会えなくなるかもしれないと思うと涙が出ました。が、病院で、背中痛みと高熱で苦しみ、戦っているちいの姿を想像して、万が一の場合というのは、ちいの体はその苦しみに耐えることができなかつた場合なのだから、私が動揺したり、泣いたりしていてもしかたがないのだと思い、できるだけ落ち着いて先生からの次の連絡を待とう、と思いました。ちいの後ろ脚が動かなくなったとしても、命だけ助かってくれたらそれで十分だと思い、いろいろな悲しい妄想はやめることにしました。

翌朝、早い時間に先生が電話をくれて、ちいの熱が下がり、薬が効いているようなので、大学病院への緊急搬送はまだ必要ないとのことでした。休診日のため面会はできませんでしたが、入院治療はそのまま続けてくれるということでしたし、私の顔を見てちいが興奮したり、様子が悪くなったりしてもいけないので、その日は先生に預かってもらうことにしました。そして翌日、2日ぶりにちいに面会したとき、ちいはとても興奮して、目には涙を浮かべているようでした。それを見て、すぐにでも家に連れて帰りたかったのですが、まだ点滴で治療しているのでそういうわけにはいきませんでした。翌日は、ちいが興奮しないよう、ケージの扉は開けずに面会させてもらいました。ちいは、ケージの隙間から差し込んだ私の手をなめました。ちいのいないところ

で先生は、

「そろそろ点滴を飲み薬に切り替えることができるので、連れて帰ることもできますが、どうしますか？」

と聞いてくれました。

先生は、いつもゆったりと、飼い主が納得できるように丁寧に話をし、考える時間をくれます。ここの病院は建物は小さいのですがスタッフが多く、治療費も決して安くはないのですが、この先生がいると思うと、他へ連れて行く気にはなれません。

「入院費がかさむので、この状態で家に連れて帰る飼い主さんも多いですよ。ただ、もしもヘルニアが再発したら、ここで再度お預かりするのではなく、大学病院で検査をしたほうが良いです。」

」

と先生は言うのです。家で、病院と同じようにちいを安静にしておく自信のない私は、先生の意見を尋ねました。

「できれば、1週間くらいは入院していたほうが良いです。ここならば、ちいちゃんが間違っ走り回ったり、立ち上がったりはしませんから、安静に治療できます。ときどきスタッフが様子を見に行くと、『なあに？』というふうにこちらを見ますが、そのあとはおとなしく伏せて休んでいますよ。」

と言ってくれたので、お願いすることにしました。1週間目までは、残り2日でした。私はちいを先生にお願いして家に戻り、家族に相談して、ちいが帰ってきたら心を鬼にして、1か月間、安静のため、ちいをケージから出さないことに決めました。私一人の決心では、きっと途中でかわいそうになって、ケージから出し、ヘルニアを悪化させてしまうに違いありません。ちいが退院するまでの長い長い2日間は、さびしいものでした。れんがいるので、さびしさがまぎれるかということ、そういうわけにはいき

ません。れん自身も、すごくさびしそうに、おとなしく過ごしているのですから。

ちいが退院した日からは、ちいのケージを居間から隣の座敷に移動して、ふすまを開けてちいの様子がいつでも見えるようにしました。居間では、来客のたびにちいが興奮して、とても安静にはできないからです。そんなときにはふすまを閉めて、ちいを興奮させないようにしました。座敷は普段、夫が事務室として使っている部屋なので、電話中にちいが吠えて仕事の邪魔をしないかという心配はありましたが、ちいは昼の間、ずっとケージの中で、おとなしく過ごしていました。せめて夜だけは、ちいに淋しい思いをさせたくないと思い、ケージの前に1畳くらいの狭いスペースを作り、そこにちいと一緒に毛布にくるまって寝ることにしました。この方法は、ある組合員さんに教わった治療法を真似たものです。その方の愛犬が以前、椎間板ヘルニアの手術を勧められたそうですが、別の病院で「手術はせず、ケージに閉じ込めて治す」方法を勧められたそうです。トイレの時以外はケージの中で過ごさせ、夜は、ケージの前に布団を敷いて、愛犬のそばで寝て過ごし、手術無しで治すことができたというのです。この方法なら、ちいにもあまり淋しい思いをさせず、私にもできそうだと思います。そして、1か月間、病院へ行く日以外は、ちいをこの部屋から出さずに過ごしました。ちいは、1週間の入院中、1日だけご飯を食べない日があり、炎症を抑えるためのステロイド剤の副作用で喉が渇き、やたらと水をがぶ飲みしていたためか、

退院のころには体も顔も、ひとまわり小さくなっていました。背中の真ん中が少しとがり、お尻の骨の形もわかるくらいに痩せ、元気だったときよりも2キロくらい軽くなっていました。夫はちいが「痩せすぎ」なのでは、と心配しましたが、病院の先生は、「正常の範囲内です。体重が増えると、脊髄に負担がかかるので気を付けてください。」というので、急にご飯を増やしすぎないように気を付けました。元気が出てきて、体重が少し増えてからは、野菜をゆでて小さく刻み、ご飯に混ぜて食べさせるようにしました。夫に、

「自分の体重は管理できないのに、犬の体重は管理できるんだね（笑）！」

と妙に感心されながらも、ちいのヘルニアが再発しないことを祈る、今日この頃です。

<おわり>